人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校種間の持続・一貫性を追求した実践事例

１．基本情報

○都道府県名及び市町村名

長野県安曇野市

○学校名

安曇野市立三郷小学校、安曇野市立三郷中学校

○学校のＵＲＬ

２．学校紹介

○学級数

三郷小学校・・・【通常の学級】１年生５学級、２年生６学級、３・４年生５学級、
５・６年生６学級
【特別支援学級】５学級　【合計】３８学級
三郷中学校・・・【通常の学級】１年生５学級、２・３年生６学級、
【特別支援学級】４学級　【合計】２１学級

○児童生徒数

三郷小学校・・・【全児童数】１０９４人（平成２５年１１月２２日現在）
（内訳：１年生 158 人、２年生 183 人、３年生 177 人、４年生 173 人、５年生 201 人、
６年生 202 人）
三郷中学校・・・【全生徒数】５７１人（平成２５年１１月２２日現在）
（内訳：１年生 161 人、２年生 191 人、３年生 219 人）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】
三郷小学校・・・「自ら学ぶ子ども」（やる気）　「心豊かな子ども」（思いやり）
「明るくたくましい子ども」（健康）
三郷中学校・・・「豊かな心を持ち　辛抱強く自分を鍛え　自ら学ぶ生徒になろう」
【人権教育において三郷小・中学校の９年間をとおして願う子どもの姿】
「人権尊重の意義を理解し、自分の大切さや他の人の大切さを認め合いながら、身近な人権問題を解決しようとする意欲と実践力のある三郷の子ども」

○人権教育にかかる取り組みの全体概要

【研究テーマ】　「自他を認め合える９年間を見通した人権教育の在り方」
【児童・生徒に見られる共通課題】
○互いを思いやる自尊感情や他尊感情の涵養
○自分の人権を守り、他者の人権を守るための実践力の向上
【研究の重点】
○学び合いを大事にした学習活動
○体験的な学習における自他の振り返り
○コミュニケーションスキル教育を取り入れた人間関係づくり

３．特色ある実践事例の内容

1　研究の内容

○小・中学校の連携

三郷小・中学校は、それぞれ市内最大規模の学校であり、１中学校区１小学校として教育の歴史を重ねてきた。小中連絡会などによる定期的な情報交換や、中１ギャップ対策及び不登校生支援としての小・中学校兼務の職員配置など、距離的にも近い特性を生かしている。また、小学６年生の中学校への体験入学においては、小学６年生全員が中学生と清掃活動に取り組むなどの交流も図っている。このような背景の中で、人権教育を視点にした小中連携も図るべく、小・中学校合同の人権教育研究会を設置して、児童・生徒の実態を人権教育を視点にして検討し、願う子供の姿を共有化したり、小・中学校の職員が合同で人権教育の研修を実施したりしてきた。

○学び合いを大事にした学習活動

学び合いとは、ペアや小グループ、学級全体などでの学習場面を設定して、互いの考えや情報を発信し合い、自分の考えを深めたり追求を見直したりして、学習課題を解決していくことであると考える。このような、学び合いを大事にした学習活動をとおして、児童・生徒は、「友達と力を合わせて活動するとできることが広がる」「自分と異なる考えを知ることは楽しい」「自分は～だと考えていたけれど、友達の考えを参考にすると課題を解決できた」などと、他の考えに共感し、認め合うよさに気づきながら、相手の取組や考えに共感し、認め合って、学習課題に取り組んだり自分の考えを深めたりする姿につながっていくと考えた。また、一人一人の取組や考えが学習の中で位置づけられることは、自尊感情の高まりにもつながると考えた。そこで、どの教科・領域においても、小・中学校ともに「学び合い」を大事にした学習活動に取り組んできた。

○体験的な学習における自他の振り返り

コミュニケーション力や人権にかかわる知識を向上させながら、日々の様々な体験的な学習（日常生活における直接的あるいは間接的な体験のすべてととらえた）　　において、自分と他（友達、先輩や後輩、家族、地域の方など）の姿を、相手意識を大事にした人権教育的な視点から振り返り、自他の言動のよさに気づくことを積み重ねていくことで、身近な人権問題に遭遇したときにそれを解決していこうとする意欲や実践力につながっていくのではないかと考えた。そこで、小学校では、体験的な学習を積極的に取り入れて心の経験を蓄積したり、授業や単元の終わりに振り返りを位置づけて自尊感情を高めたりすることに力を入れてきた。中学校では、特別活動や道徳の時間を中心にして、自他の取り組みや考えを振り返ることに力を入れてきた。

○コミュニケーションスキル教育を取り入れた人間関係づくり

中学校で実施したソーシャルスキル尺度調査やＱ－Ｕの結果からうかがえた生徒の実態から、小学校で取り組んでいた「話す」「聴く」「質問する」「自己主張」などの仕方を段階的に学習するコミュニケーションスキル教育が、中学校でも必要だと気づいた。そこで、小・中学校職員が同じ講師の先生からコミュニケーションスキル教育に関する研修を受けたり、小・中学校で同じ本を購入して読んだりするなどしてコミュニケーションスキル教育の研修を進めてきた。また、小・中学校が共に、コミュニケーションスキル教育の内容を位置づけた人権教育の年間指導計画を作成して、９年間の見通しをもって学習ができるように情報を交換してきた。さらに、コミュニケーションスキルを学ぶだけでなく、構成的グループエンカウンターも取り入れながら学習ができるようにした。児童・生徒の実態に応じながら構成的グループエンカウンター

に取り組むことは、学習した心地よいコミュニケーションスキルを活用したり、友達の性格や考えの相違に共感し合ったりして、互いを認め合う雰囲気を醸成していくのに効果的であると考えたからである。このような取組をとおして、学んだコミュニケーションスキルを意識し続けたり日常生活の中で一般化したりして、よりよい人間関係をつくっていくためには、継続的な学習が必要であることがわかってきた。そこで、小・中学校において、同じコミュニケーションスキルの習得を目的にした学習でも、児童生徒の実態に応じて活動の内容を考えながら、繰り返して学習することを大事にしてきた。

2　研究の全体構想図

【児童・生徒の実態】

○友達同士仲がよい子供
○下級生を思いやることができる子供
○いじめにつながる言動に敏感で、正義感が強い子供
○相手を思いやる気持ちをさらに大事にしていきたいと願う子供
●友達から認められていないと感じていたり自分に自信がもてなかったりして、自尊感情が低い子供
●相手意識が脆弱になりやすい子供
●自他の人権を守り、人権問題を解決していく実践力の高まりが期待される子供
●コミュニケーションスキル教育が必要な子ども

↓

【研究テーマ】　自他を認め合える９年間を見通した人権教育のあり方

↓

学び合いを大事にした学習活動

◆一人一人の考えの位置づけ
◆ペア学習や小グループなどでの意見交換による学習課題の解決
　⇒○自他の考えや取り組みのよさへのきづき
　　○互いの取り組みや考えに対する共感と認め合い
　　○自尊感情の高まり

体験的な学習における自他の振り返り

◆相手意識を大事にした自他の言動の振り返り
　⇒○自他の言動のよさへの気づきと共感、認め合い
　　○人権を守ろうとする価値観の育み
　　○人権問題を解決していこうとする意欲と実践力の向上

互いを思いやる自尊感情や他尊感情の涵養
自他の人権を守る意欲や実践力の向上

コミュニケーションスキル教育を取り入れた人間関係づくり

◆聴き方や話し方、自己主張の仕方などの段階的かつ継続的な学び

◆各教科・領域における、必要に応じたコミュニケーションスキル教育的な視点からの助言や支援

⇒○心地よい人間関係づくりの力の育み

○認め合える雰囲気の醸成

【９年間をとおして願う子供の姿】

人権尊重の意義を理解し、自分の大切さや他の人の大切さを認め合いながら、身近な人権問題を解決しようとする意欲と実践力がある三郷の子供

４．実践事例の実績、実施による効果

1　体験的な学習における自他の振り返りに関する事例　＜小学校４年生：体育＞

（1）単元名　　「ネット型ゲーム『プレルボール』」

（2）課題と課題解決のための手立て

○今までに行ってきた「ティーボール」や「簡易型ハンドボール」においては、ゲーム中に友達に声をかけ合って励まし合う姿があまり見られなかった。そこで、相手とはコートを挟んで接触がなく、チームの仲間とは近い距離でコミュニケーションをとりやすいネット型ゲームである「プレルボール」を教材化した。また、どういうときに声をかけたり、どんな声をかけると前向きにゲームに取り組めるかについて、考える場面を位置づけるようにした。

○今までの体育の授業において、「いつも友達が自分を見てくれていることで運動が苦手な児童の励みにつながるのではないか」と考え、ペアを組んで毎時間互いのプレーを見合って、友達のよい姿を学習カードに記入する活動を続けてきた。しかし、記入されることでうれしそうな児童がいた反面、ペアの友達の姿ばかりに集中してしまい、プレーを楽しむことができない姿も見られた。そこで、全員がかかわれるゲームを教材化するとともに、授業の終末時に振り返りの時間をきちんと確保して「ベストプレー賞」をチーム内で考え合うようにした。

（3）授業のねらい（本時の主眼）

ボールをつなげるようになってきた子供たちが、動きを作戦盤で考えたりチーム練習をしたりすることをとおして、チームで協力して試合を楽しむことができる。

（4）授業における人権教育の視点

○ゲーム中に仲間のプレーや頑張りに気づき、意識して声をかけ合うことをとおして、成功しても失敗しても次のプレーに前向きにつなごうとする。

○振り返り場面でよかったことやうれしかったことを記述したり、チームのベストプレー賞を決めたりすることで、チームへの所属感を高めたり自尊感情を高めたりすることができる。

○作戦タイムにおいて、自分はチームのためにどんな動きができるのかについて仲間に伝えることで自分の役割を自覚するとともに、自信をもって試合に参加すること

ができる。

（５）実践から得られた効果

＜授業での児童の姿と考察＞

○得点を入れることができると、大きな声で称え合ったり、ハイタッチをしたりして、共に喜びを共有して雰囲気を盛り上げることができていた。

⇒励ましや賞賛のかけ声、ハイタッチといったチーム内のコミュニケーションは、体育の技能の向上とともに、仲間意識や自尊感情の向上という面からも効果があることがわかった。

○運動が苦手な児童も、自分からボールにかかわることができ、どの児童も活発に動いていた。また、作戦タイムでは、自分がどう動けばよいのかについて友達のアドバイスを真剣に聞いたり、「こうすればいい？」などと確認をしたりしている姿が見られた。

⇒「プレルボール」を教材として選んだことは、運動が苦手な児童が楽しく積極的にプレーに参加することにつながった。また、コート内の全員がボールをつながなければ成立しないゲームであることや、ネット型のゲームであるために、ワンプレーごとにチーム内でコミュニケーションをとりやすく、友達の姿を認め合う姿につながったのではないか。

○チーム内でベストプレー賞を決める場面では、友達のよかった姿をしっかり見ていて、認め合っている姿が見られた。また、名前を呼ばれた児童は、とてもよい笑　　顔であった。

⇒限られた時間での振り返りであったが、チーム内でベストプレー賞を考え合ったことは、互いにゲームを楽しみながら、自尊感情の高まりに大いに効果があったと考えられる。

＜取組後に見られるようになった児童の姿＞

以前よりも自分から友達にかかわっていこうとする姿が見られるようになった。また、友達のよい姿に賞賛の声をかけたり、友達の失敗に対する温かい声がけをしたりする姿が多く見られるようになり、学級の温かい雰囲気を醸成できたとともに、いろいろな活動に前向きに取り組める姿につながった。

２　体験的な学習における自他の振り返りに関する事例　＜中学校３年生：特別活動＞

（１）主題名　　「３年○組のこれから」

（２）取組のねらい

取り組んだ３年生の学級は、学級集団への帰属意識が高く、困っている友達を気　　遣ったり友達を助けたりしようとする生徒が多く、互いを思いやる学級の雰囲気を醸成してきた。

合唱コンクール前には、音がとれなくて困っている男子の気持ちを思いやって、学級の練習や自分の取組を考えることができた。この学習をとおして、合唱練習への取組がさらに意欲的になるとともに女子が男子の頑張りを認める姿が多くなり、男子は自信をもって歌えるようになった。そして、合唱コンクール当日には、全員が本気で合唱に向かい合い、自分たちの思いを伝えることができたことに喜びを感じる生徒の姿が多く見られた。

しかし、文化祭後は学級としてまとまる機会が減り、学級で団結して一つのことに取り組みたいと願うものの、何を頑張ればよいのかわからないでいる生徒の姿が見られ

た。また、自分の進路実現に向けて学習に集中できない生徒や進学目的が明確になっていない生徒、自分の進路や学習への取り組みに関する悩みを保護者ときちんと話ができていない生徒が見られた。

そこで、この学級がこれから頑張ることを考える場面を設定し、一人一人が進路実現に向けてどのように取り組んでいくかを考えたいと願った。そこでは、実際に期間を設けて各自が取り組んだことを振り返り、友達と自他の頑張りや悩みを意見交換したり、親の励ましや願いが書かれた手紙を読んだりする活動を取り入れることで、生徒がより主体的に自分の進路実現に取り組んでいこうとする意欲が高まるだろうと考えた。

（３）授業のねらい（本時の主眼）

各自が決めた学習への取り組み計画に沿って実践してきた生徒たちが、自分たちの取り組みを振り返る場面で、自分や友達の取り組みの頑張りや悩みを聞き合ったり、親からの手紙を読んだりすることをとおして、進路実現に向けて更に学習を頑張っていこうとする意欲を高める。

（４）授業における人権教育の視点

〇頑張ったことや困難点などを観点として、自分の取組について素直に振り返ることができる。

〇自分や友達の進路実現に向けた取組について意見交換をし、その頑張りや悩みを認め合うことができる。

〇様々な人たち（親や友だち、教師）の励ましに支えられながら、主体的に自分の進路実現に向けて取り組んでいこうとする力を育むことができる。

（５）指導上の留意点

〇学級内において互いの考えを言いやすい雰囲気を醸成するために、計画的に構成的グループエンカウンターに取り組んでおく。

〇将来の夢の実現に向けて日々頑張っている生徒に、自分の夢や取り組んでいることなどを無理のない範囲で話せるように、事前に打合わせをしておく。

〇保護者に、学習のねらいや内容を説明して、生徒への励ましや進路実現に向けた自分の体験などについて手紙を書いていただく。

（６）実践から得られた効果

＜授業での生徒の姿と考察＞

授業後の学習カードに次のような記述が見られた。

> 今頑張っているのは私だけではなくて、みんな同じように頑張っているから自分も負けられないなって思いました。また、受験は１人の戦いだと思っていたけれど自分の親も私のことをすごく応援してくれていて、こんなにも支えてもらっていて１人じゃないって思えました。自分のためにも、両親のためにも、まわりで私を支えてくれている全ての人のためにも、後悔しないように努力して、自分の進路を自分で切り開いていきたいです。

> 「受験は大変」だと受験生だけがそういう気持ちだと思っていましたが、今日親の気持ちを改めて知って、頑張っているのは自分だけではないんだと思いました。今日の授業を振り返ると、親や友だちの気持ちや頑張りは自分の励みになると心から感じることができました。本当に授業に感謝です。

もちろん受験生なので勉強が第一ですが、進学するということは卒業してみんなと離れることにもなります。だから、受験をみんなとの一つの思い出として残るようなものにしたいです。友だちが言っていたように、頑張らなければ後悔が残るだけです。自分も後悔したことはたくさんあります。「受験の後悔を生かして進む」よりも「今までの後悔を生かして自分の進路に挑む」という気持ちでいたいです。
○組の一人一人が悩みながらも、それぞれの夢に向かっているから、気持ちは同じです。また、親も先生も応援してくれている。だから、全員で頑張る、ただそれだけです。協力していきたいです。

バレエの世界で活躍するために日々努力しているＡ生の姿をはじめとする学級の仲間の頑張っている姿や、進路に関して悩んでいることについて意見交換したことは、自分の取り組みを素直に振り返ったり、友達の姿を認め合ったりすることにつながったと思われる。また、保護者からの手紙を読むことで、自分たちが親に見守られたり応援されたりしていることに気づき、前向きに自分の進路実現に向けて取り組んでいこうとする気持ちを高めることができたと思われる。

＜取り組み後に見られるようになった生徒の姿＞

授業後に実施したＱ－Ｕの結果からは、次のようなことがわかってきた。なお、前回のＱ－Ｕは、本年度の５月に実施している。

○学級意欲プロフィールでは、どの観点の得点も、全国平均を大きく上回ることになった。

○学級生活満足群に属する生徒数がかなり多くなった。特に、非承認群にいて心配していた生徒が、満足群に属することができた。

○学級への所属感や、担任との関係、学習や進路に関する意欲については、かなり望ましい方向に変化した。

また、教職員の観察から、学習に対して集中して前向きに取り組んだり、悩みを相談し合ったりする生徒の姿が多く見られるようになったと感じている。さらに、研究の重点を大事にしながら同じような取り組みをしてきた他学年の学級では、「人権についての学習をしよう」と言うと、喜んで取り組む姿が多く見られるようになった。人権問題について学ぶということは、堅苦しいことではなく、自分たちをよりよい方向に変化させることができる学習であるという雰囲気が醸成されつつあると考える。

５．実践事例についての評価

○願う子供の姿を共有化することで、小・中学校９年間をとおして、三郷の子どもの成長を見守るという意識が教職員の間に育ってきた。また、人権教育の９年間をとおした全体計画、各学年の年間指導計画を作成したり、小・中学校の教職員が合同で研修を行ったりするようになったことで、小・中学校において三郷の子供を共に育てるという環境が整えられてきた。

○人権教育は全ての教育活動の基礎であるので、今後は更に様々な場面における小中連携を活発化させるとともに、人権教育を窓口にして学力向上へと共同で取り組んでいけるようにしていきたい。

○地区ごとの人権学習会や学社連携の人権教育活動に力を入れている地域でもあるので、今後は、地域との連携を視野に入れて、人権教育を推進していきたい。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

三郷小学校、三郷中学校
安曇野市内最大の１中学校区１小学校としての三郷小中学校が、互いに校種間連携を図りながら人権教育を推進している事例となっている。小中学校間の連携を核としながら、学び合いを大切にした学習活動や体験的な学習における自他の振り返り、コミュニケーションスキル教育を取り入れた人間関係づくり等の取組が展開されている。 実践事例の中では、殊に、三郷小学校の実践として紹介されているネット型ゲーム「プレルボール」の取組が注目される。チーム内のコミュニケーションを重視し、子供同士が仲間のプレーやがんばりを評価し合うとともに、振り返りの場面で「ベストプレー賞」を決定するなどして、所属感や自尊感情を高める工夫が加えられている点は、身体運動を通じて人権意識の高揚を図る取組と相まって高く評価される。 今後も小中学校間の連携・接続を重視しつつ、継続的で粘り強い実践が展開されることを期待したい。